# 誘惑W女子大生

## 清楚な義姉と豊満美女

巨道空二
挿絵／翔丸

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

# 目次


序章　夏のきざしと年上の人……4
第一章　年上の彼女の、誘惑の部屋……12
第二章　義姉の濡れた肌の誘い……63
第三章　姉と恋人の艶肌比べ……113
第四章　旅館と海と柔肌と……172
第五章　二人と一人とご奉仕と……226
終章　姉と、恋人と……280

## 登場人物 *Characters*

### 今泉 孝
(いまいずみ たかし)

中肉中背の気の弱い高校生。幼いころ両親の再婚で義姉となった暦美に異性としての感情を抱いている。

### 今泉 暦美
(いまいずみ こよみ)

孝の義理の姉。清楚でスレンダーな女子大生。昔から孝のことを異性として意識していたが自分の気持ちに正直になれないでいる。

### 成島 由香理
(なるしま ゆかり)

暦美の親友の女子大生。ショートカットが似合う活発な性格で、スタイル抜群の豊満な女性。孝に恋愛感情を抱いている。

# 序章　夏のきざしと年上の人

雲の切れ目から差し込む光が世界を明るく染め上げていく。色とりどりのあじさいの花を水滴が飾っていて、キラキラと輝いていた。雨上がりの空気はまだ湿っているけれど道路も乾きはじめている。

「やっぱり、晴れたね。傘がいらなくなっちゃったなあ」

軽やかな空色のワンピースの女性が空を見上げた。小さなバッグをひとつ、両手で持ちながらクルリと回ってみせる。長く艶やかな黒髪がふわりと舞い上がった。

「姉さん。傘くらい持ってよ。こっちは荷物持っているんだから」

びっくりするほどの早さで広がっていく雲の切れ目。あっという間に明るくなっていく空の明るさが初夏を感じさせた。眩しそうに見上げる少年の両手にはけっこうな量の荷物が提げられている。

「ふふふっ。タカちゃんなら力持ちだから平気でしょ。お願いね」

姉さんと呼ばれた女性がにっこりと微笑んでみせる。落ち着いた、優しげな顔も小さめで、小柄ながらバランスのとれた肢体の持ち主だ。ほっそりとして少女のような

雰囲気もあるが大学生で、名前を今泉暦美（いまいずみこよみ）という。
サンダル風の靴に、綺麗に手入れされた爪の輝きを見せつける綺麗に整った足指。ほっそりとしながらもしなやかな足首からふくらはぎへのライン。逆光気味の光の中、しなやかな女性の身体の曲線が透けてしまっていた。
小ぶりながらも形のよい胸。無駄のないウエストラインに背筋がゾクリとする。逆光に浮かび上がる身体と、ほっそりとした肢体にまとわりつく布地の作り出す立体感に普段意識したことのない感覚を呼び起こしている。
「だ、だから。ぼくの両手は荷物で埋まってるから。力持ちでもないしっ」
ちょっと線の細い印象のある少年は不満そうに口をとがらせた。胸の奥にかすかな疼きを感じる。一瞬透けて見えた姉の身体のシルエットが脳裏に焼きついていた。
ほっそりとした首筋にかかる黒髪。透明感のある雪白の肌。抱き寄せたら、自分の腕の中に収まってしまいそうなほっそりとした身体。ふっくらとした胸の膨らみやしなやかな腰のラインに視線が泳いでしまっている。
「もう。暦美ったら。孝君（たかし）、傘は私が持つね」
ポン、と少年の肩が叩かれた。ほとんど少年と同じ高さに、涼やかな瞳が輝いている。長身の女性だ。栗色の髪をショートカットにし、すっきりとしたうなじを陽光に

さらしながら、傘置きから傘を取り上げる仕草が鮮やかだ。
「さすが由香理さん、ありがとうございます」
「おだてても、何も出ないけどね。さ、行きましょう。孝君」
少年は今泉孝。現在高校三年生。姉の暦美は大学二年生で、由香理は高校の頃からの暦美の親友だ。
スポーティなTシャツと、ジーンズのスカートにスニーカー。キャンバス地のバッグ。成島由香理は暦美とは対照的で、それだけに少年には眩しい存在だった。背も高くて、とにかく格好いいのだ。
背が高いだけではなく、胸元の膨らみは衣服の上からも明らかなほどにしっかりと盛り上がり、活動的なだけあってしっかりと絞られたウエストから、むっちりと張り出したヒップライン。息苦しくなるほどに魅惑的な肢体の持ち主でもある。
手足が長くて、スポーツをやっていたのか動きのひとつひとつが綺麗だ。年上の女性のちょっとした仕草にも胸が高鳴るのを感じる少年だった。ショートカットですっきりとした首筋が魅力的で、つい視線が向いてしまう。
「クルマに荷物を置いたら、もう少し買い物しようね」
三人で肩を並べて歩きながら、暦美が微笑む。二人と一緒に行動しているのが嬉し

くてたまらないらしい。
「ええっ、まだ買い物するの？　さっきあんなに買ったじゃない⁉」
「まあまあ。今度は荷物にもならないし。お昼ご飯、おごっちゃうから」
「ううっ。今日の由香理ちゃん、タカちゃんにいいかっこしいだあ」
少年の不満を軽くいなした由香理に、わざとらしいジト目が向けられた。
「暦美が孝君に甘えすぎてるだけでしょ。労働には正当な報酬が必要よ」
「さすが由香理さん。ぼく、一生ついていきますっっ！」
間髪をいれない少年の食いつきに長身の女性が苦笑する。
「大げさねえ。ま、まずはクルマまでついてらっしゃい」
「むうっ、タカちゃんはあたしのだから。由香理ちゃんにもあげませんっ」
「暦美の弟なら、私の弟も同然よ。ね、孝君？」
「え、ええ、まあ……」
高校生と大学生ではしかたがないかもしれないけれど、完全に弟扱いは、ちょっと寂しいものがある。姉とは対照的に活動的な由香理は以前から少年の憧れであって、彼女と二人きりのデートというのが今の孝の夢でもある。
「もう。タカちゃんはあたしの弟だもの。たとえ由香理ちゃんにも譲れないわ」

「彼氏もいる女子大生が何言ってるんだか。孝君、行くわよ」
耳に小さなシルバーのピアスが光っていて、ドキリとした。ちょっと吊り目というか、笑うと猫のような雰囲気になる。長身の女性はいつでも大人で、ときに子供っぽくすらある姉とはまるで正反対だ。
（やっぱり、由香理さんっていいよなあ……）
小型自動車の荷室に荷物を積み込むと、三人はアーケード街に向かう。どちらかといえばほっそりとしておとなしい暦美と、長身でさっぱりとした性格の由香理。服装から性格まで対照的な二人はそれぞれに人目を引いた。
由香理も意外と世話好きで、おっとりとした性格の暦美とはよいコンビだ。今だって、歩くペースをしっかりと相方に合わせてくれている。
「暦美、この前雑誌に載っていたお店でいいよね？　まだ行ったことないし」
「うん。由香理ちゃんにお任せ。おいしいといいね」
いつも、女らしいというよりは活動的な印象の服ばかりだけれど、その身体は実に女性らしく発達している。お尻のむっちりとした膨らみも、Tシャツの胸元をぐっと持ち上げる乳房の隆起も、姉とは比較にならない大きさだ。
上背があるだけあって、均整もとれている。モデルになるには胸やお尻が発達しす

ぎているかもしれないけれど、見ているだけで格好いい。ショートカットの髪のおかげで優美なうなじのラインを拝めるのはありがたかった。

（姉さんだって、黙っていればいい線いってるんだけどなあ）

姉の暦美も、美女ぶりでは負けていない。おとなしやかな、おっとりとした表情と整った顔立ちは上品だし、ちょっと小柄で多くの男性とつりあう身長。ほっそりとした手足は肌も白くて、ツルツルスベスベだ。細身といいつつも出るべきところはしっかりと出ている身体は、身長さえあればモデルにだってなれそうなくらいだ。

（姉さんだって彼氏いるんだしな。ちょっとくやしいけど）

ちょっと童顔で、孝と歩いていると同年齢にしか見えないとか、長女のくせに妙に甘え上手で弟の操縦がうまかったりとか、黒目がちの瞳で頼まれるといやとは言えなかったりするのだが、姉弟というのはそんなものなのかもしれない。

（ま、姉さんは……家族だもんな。うん。血は……繋がってないけどさ）

暦美と孝は、父母それぞれの連れ子にあたる。もうぼんやりとした記憶だけれど、両親がささやかながら式をあげたのを覚えている。再婚同士だけあってこじんまりとした、身内だけの式だったけれどみんなが笑っていた気がした。

「どうしたの？　孝君、置いてっちゃうよ」

「くすくすっ。タカちゃん、何考えてたの？」
なんだかんだ言っても、優しい姉やその親友と一緒に過ごす休日は楽しい。その姉と遺伝的には家族でないことなんか、ごく小さいことのはずだった。

「ねえ、お父さんたち、旅行行かない？」
そう言った暦美の手には、小さなチケットが握られている。休日の朝。生活サイクルのずれがちな家族がそろう貴重な時間だった。
「そりゃ行きたいけど、どういうこと？」
さっそく母親が食いついてきた。旅行好きで、家族旅行以外にもスーパーなどの懸賞の日帰り旅行などにも参加している。
「これ、旅行会社のギフトカード。ほら。もうじき、結婚記念日でしょ？」
目を丸くする両親の前に差し出される、洒落た封筒。冊子とギフト券を手にした母親が目を潤ませながらも子供たちに尋ねた。
「う、うれしいけど、何日も家を空けちゃうけど大丈夫？」
照れくさそうに口元に手をやりながら微笑む姉が、こちらに視線を向けてくる。
「大丈夫だよ。別に、ぼくひとりじゃないんだし」

そう口に出した瞬間、ドキリとした。確かに一人ではないがほかの人間はいない。二人きりなのだ。この細くて綺麗な自慢の姉と二人で暮らすと思うと、なぜか心臓が早鐘を打つのを感じてしまった。

あわただしく旅行の手配をした両親が旅立ったその日。タクシーで駅に向かう両親を見送った暦美が、小さなため息をついた。

「どうかしたの、姉さん？」

「うん。ちょっと、疲れちゃった。二人ともテンション高いしね」

子供からのプレゼントというだけでも喜ぶ両親だ。旅行ともなればその喜びもひとしおのようで、子供たちが驚くほどにはしゃいでいた。

「プレゼントした本人のくせに。疲れたなら、部屋で休んでいればいいよ」

「うん。あたしはちょっと部屋にいるから」

何かをふりはらうような仕草。自室のある二階への階段を上る姉は、どことなく小さく、不安そうに見えた。

# 第一章　年上の彼女の、誘惑の部屋

ピッ、ピピピッ――。

電子音を響かせる携帯端末を机から取り上げる。ディスプレイ画面に表示される名前にドキリとした。姉の親友、由香理からだ。

「あ、孝君？　悪いんだけど、駅まで来てくれる？　暦美が酔っちゃって……」

姉はお酒を飲むことはあるが、酔うというほどに酔ったところは見たことがない。由香理の口調もいつもより堅かった。何かあったのだ。部屋着の短パンからジーンズにはきかえると、靴をひっかけるようにして家を出た。

（両親がいないから飲みすぎたってことは……まさかなあ）

普段は飲まない暦美だったが、このところふさぎがちだったことを思い出す。悩みを抱えていたのかもしれない。気づくと足を早めていた。

「あ、孝君、こっちよ」

夕暮れの駅は店舗の明かりがイルミネーションとなって、夕闇の中に浮かび上がっている。ディスプレイやショーケースがきらめくビルの壁によりかかるようにして姉

はいた。脇に立つ親友がホッとしたように手を振っている。
「悪いわね。ちょっと一人じゃ手に負えなくて」
夕暮れの街で、由香理の周囲が浮かび上がったような気がした。長身にジーンズのジャケットとミニスカートが脚の長いのを強調して、すばらしく似合っている。
「いえ、いつも姉さんがすいません。……ほら、姉さん、大丈夫？」
肩に手を触れると、するすると姿勢が低くなる。そのまま座り込んでしまった。すうすうと、無邪気な顔をして寝息をたてていた。
「あちゃあ、寝ちゃったか。どうする？　タクシー、呼ぼうか」
「いえ。まずは起こしてみます。姉さん。立てる？」
肩をつかむようにして揺り起こす。カクテルらしい甘い香りとアルコールの匂いが鼻孔をくすぐった。けっこう飲んでいるらしい。
「あん……んん、タカちゃんだあ……えへへ。来てくれたんだあ」
ロングの髪をかきあげながら、どこかぼおっとした表情で姉が笑う。長いまつげとほのかに赤く染まった頬が妙になまめかしくてドキリとしてしまう。
「うん。だから、帰ろう。歩ける？」
腕につかまった暦美がふらつきながらも立ち上がる。それだけで髪がサラサラと流

れ、シャンプーのよい香りが広がった。
「もちろん。あるけるわよお……うわ、ちょっとクラクラするぅ……」
「ほら。肩を貸すからさ。家まで歩くよ」
「うん。わかったぁ。タカちゃん、ありがとう。がんばるう……」
なんとか立ち上がった様子に由香理の心配げな表情も和らいだ。
「よかった。これなら帰れそうね。それじゃあ、荷物は私が持つから」
「すいません、由香理さん。お願いします」
ぐにゃぐにゃと頼りない姉の体重を腕に感じながら、まだ暗くなりきっていない繁華街を歩く。酔っぱらうにはまだちょっと早い時間で注目を集めてしまうのはしかたがないけれど、やっぱりちょっと恥ずかしかった。
「ほら、ついたよ。姉さん。ベッドに横になって」
歩いたおかげで酔いがさらに回ってしまったらしく、暦美は耳まで赤くなっていた。ぐったりとして重くなった姉の身体を、なんとかベッドに横たえる。
「ううっ。気持ち悪いぃ……」
「ちょ、ちょっと我慢しなさい。私、お水持ってくるから。孝君。お願いね」
「すいません、よろしくお願いします」

由香理が冷水を汲みに部屋を出ていくと、姉が服の袖をつかんでいた。
「ねえ、タカちゃん。もっとこっちへ来てぇ……早くぅ」
「どうしたの？　珍しいよね。姉さんが酔っぱらうなんてさ」
目がすわっている。逆らわないほうがよさそうだ。
「ほらあ。もっと近くに来てえ……もう。言うことを聞きなさい」
さらに引っ張られると、鼻がくっついてしまいそうな至近距離。長いまつげも、繊細な眉も、どこか悲しげに潤んだ瞳も、すべてが近くて心臓が早鐘を打っていた。
「来ないと、こうだっ」
「ちょ、ちょっと姉さん……んっ、んんっ……」
ぐいっと引き寄せられると、唇に未知の感触があった。柔らかくて、ぴっとりと密着する粘膜が痺れるような快感を発生させている。初めての快感が衝撃となって脳髄を直撃し、身体が硬直したように動かない。
姉の、暦美のシャンプーの香り。若い女性の肌の甘い香りが鼻孔に充満し、柔らかい女の身体がすぐ目の前にある。頭を抱きしめるようにする腕の柔らかさ。首筋に、肩にかかる彼女の腕の重さと暖かさが心地よくて、頭がクラクラしそうだ。
「ね、姉さん……？」

なんとか引き離したら長いまつげに涙がたまっている。みるみるうちに膨らんだかと思うと、目尻から大きな粒となってこぼれ落ちていく。
「んん……タカちゃん、ごめんね。お姉ちゃん、やっぱりダメみたい……」
それだけ言葉に出したかと思うと、暦美は安らかな寝息をたてていた。たった今までのことが嘘みたいに平穏な顔。動揺しながらも、そっとベッドから離れる。
久しぶりに入った姉の部屋は記憶にあったよりも落ち着いた内装になっている。やはり大人の女性の部屋なのだと思った。
「あ、由香理さん。お水、もう大丈夫です。姉さんは寝ちゃいました」
大した時間ではなかったのだろう。階段を登りきったところで水を持ってきた由香理と視線が合った。彼女らしくもなく、かすかに視線が泳いでいた。
「手間取っちゃって、ごめんね。勝手がわからなくて……」
水の入ったコップを持ったままの由香理と階段を降りていく。いつもと同じ階段のはずなのに、なんだか知らない家の階段のような気がした。
「ふう。冷たいものでもいれますね。由香理さん、本当にすいませんでした」
「気を使わなくてもいいわよ。少しだけ休憩させてくれれば嬉しいけど」
リビングのソファに身体を沈めながら、由香理が大きくため息をついた。

「あの、暦美から、何も聞いてない？」
長身の彼女はどこにいても絵になる。均整のとれた肢体がモデルみたいだ。
「いえ、何も。姉さんが酔うなんて珍しいから、びっくりしました」
「うん。あの娘、彼氏にフられちゃったのよ。それで、ね」
それで納得がいった。先ほどのキスは、彼氏と間違えたのだろう。初めてのまともなキスの相手が姉というのはどうなのか。いくら血が繋がっていないとはいえ、家族はありえない。そう自分に言い聞かせる。
「彼氏と旅行に行くって旅行券買ったけど無駄になっちゃったらしいしね」
「旅行って……それでか。両親にプレゼントしてました」
「そうなのよ。孝君が来るまで、暦美、かなり荒れていたのよ」
コップを受け取った由香理が、両手で包み込むような仕草をした。目線が下に向けられると、普段活発な彼女のまつげの長さに驚かされる。服装こそ中性的なものや活発なものを選ぶけれど、とても女性的なひとだった。
（姉さんと同い年だけど、ずっと……大人だよなあ）
向かい合わせのソファに座ると、彼女の整った顔立ち、よく発達した身体がまともに視界に入ってしまい、目のやりどころがなくなってしまう。胸元は形よく盛り上が

っているのが薄手のシャツの上からもはっきりわかる。
ワイルドな雰囲気のジーンズのジャケットを押しのけるようにして、二つの隆起がシャツを持ち上げてその形をはっきりと現している。喉から胸元のあたりの肌がやけに眩しく見えて、身体の奥が疼くような感覚があった。
首をかしげる仕草でショートカットの栗色の髪が首筋にかかるのが色っぽく、身体の奥が熱くなってしまう。喉元から胸のあたりまでが、あまりに無防備だった。
「暦美をフるなんて、もったいないと思うんだけどねえ……」
年上の女性がため息をつきながら脚を組む。ただでさえ短めのジーンズのスカートの奥が見えてしまいそうだ。長い足はみっしりと肉が詰まっているだけではなく、流麗な曲線の見事さに思わず生唾が出てしまいそうだ。
「彼氏は弟君に嫉妬したのかもしれないわね。暦美って、ブラコンだし」
「ぼ、ぼくのせいですか？」
くすり、と笑った由香理がこちら側のソファに移った。ふわりとよい香りがして、クッションの沈み込みが憧れの女性をリアルに感じさせた。
「暦美は孝君大好きだしね。彼氏にもけっこう話していたみたいよ」
姉が弟に執着するのは昔からだった。世話好きな暦美は孝が中学生になるまでは本

当にべったりで、行きすぎて孝にひどく冷たくされたことに耐えきれなかった姉は泣く泣く距離を置くようになった。孝が高校生になった頃には、普通に仲のいい姉弟になったつもりだったのだが、まだまだだったのかもしれない。

「ねえ。孝君。私の彼氏になってみない？　暦美のブラコン対策にもなるわよ」

いつもの輪郭のくっきりとしたさっぱりとした口調ではない。どこかねっとりとした、大人の女性を感じさせる声だった。ちょっと猫を思わせる瞳がキラキラと輝いている。いらずらっぽい表情が実に魅惑的だ。

「そんな冗談、ぼくが本気にしちゃったらどうするんですか」

軽く受け流したつもりだったけれど、声がかすれていた。たとえ冗談でも由香理の誘いはあらがいがたい引力を持っていて、引き込まれてしまいそうだ。つやのある唇が動き、さらに誘惑的な言葉を紡ぎだす。

「あら。冗談を言っていると思うの？」

肩にすんなりとした女性の手が置かれた。いつの間にか、二人の距離はさらに小さくなっていて、お互いの息づかいすらも感じられるくらいになっていた。

お互いの顔が、すぐ近くにある。この距離感は友人とかじゃなくて、明らかにそれ以上のもの。彼女の顔しか目に入らない。間接照明に照らされるかすかに上気した頬

といい、潤んだ瞳がなんだかひどく色っぽい。あまりに誘惑的だ。まだ女性経験の足りない少年には荷が重い状況だった。

「私、本気よ。フリーだし。つきあってみない？　孝君……」

すんなりと伸びた腕が少年を引き寄せる。姉とは違うシャンプーの香り。しっとりとした滑らかな肌が触れる。かすかにアルコールの匂いがした。

「え、ええと。由香理さん、酔ってますよ……ね？」

「酔っていたら、だめ？　酔ってるから言えることも……あるのよ」

柔らかい二の腕が触れるだけで衝撃を感じる。しっとりとした肌の感触が一瞬のうちに官能的な刺激に変化していた。彼女の重みが肩にかかり、ソファの背に押しつけられてしまった。初夏の開放的な服装が二人の身体を密着させていた。

（うっ、うわっ。柔らかい。柔らかいよ……すごく、すべすべして……）

そのままぎゅっと抱きしめられた。ショートカットの髪はよく手入れされて、柔らかな感触が心地よい。お互いの頬が触れあい、柔らかく暖かい人肌の滑らかさにゾクゾクしてしまう。若い女性の肌の甘い肌の香りが鼻腔をくすぐった。

彼女の豊かな二つの膨らみが押しつけられる。ボリュームのある半球状の形よい乳房が二人の身体の間で形をゆがめている。ふっくらとして、密着しながらも押し返し

てくる柔美な感覚に　下半身の一部が急激に固く、熱くなってしまっていた。
「好きよ、孝君……」
耳元で囁かれるだけで身体が硬直してしまいそうだ。年上の女性の誘惑に何もできないまま身体をこわばらせている自分が情けない。自宅のリビング。姉が彼氏に振られて泣いているのに。どうにも思考がまとまらなかった。
「ん、ちゅっ――」
頬に柔らかく、ねっとりとした唇が押しつけられる。瑞々しく張りつめた果実のような、それでいてどこまでも柔らかくて心地よい感触。
「覚えておいてね。孝君。私は、あなたのことが好き……」
もう一度、軽く頬にキスをしてくれた女性は、そう囁いた。いつもの彼女らしくもない、控えめな口調。心地よくも暖かい感触に包まれながら彼女の言葉を聞いているだけで、身体が溶けてしまいそうな気がした。
「さあ、遅くなっちゃうから、そろそろ帰るわ」
身体を離したときには、いつもの彼女に戻っていた。きりっとしていて、快活な由香理の口調にホッとしてしまった。
「ぼく、送ります」

「今晩送ってくれるってことは、つきあうってことなのよ？　それでも？」
ちょっと意地悪な口調。赤い唇がすごく艶やかで、それだけでさっきの頬への感触を思い出してしまう。それだけで首筋のあたりがゾクリとした。瞳は挑発的に輝いて、いつものさっぱりした由香理と同一人物とは思えないほどに誘惑的だ。
「やっぱり心配だし、つきあうとか関係なしに、送らせてください」
「もう。それじゃあ、帰るまでは彼氏扱いしちゃおうかな」
幸い彼女のアパートは電車を使うほどではない。歩いていける距離だ。すっかり暗くなった道を、今度は長身の女性の家に向かって歩いていく。
並んで歩くと、かろうじて孝のほうが背が高いという程度だ。ほっそりとした姉と比べるとはるかに起伏に富んだ身体を横目に見るだけでもドキドキした。胸の膨らみも、張りつめた太腿も、可能であればずっと眺めていたい。
「二人で歩くのって、初めて……じゃないわね。二回目かしら」
「はい。姉へのプレゼント選びを手伝ってもらって以来です」
そうだ。あのときも、綺麗な女性と並んで歩くの意識して、真っ赤になりながら歩いていた。姉の親友。背が高くて、活動的で、世話好きなひと。心臓がびっくりするくらいに早く打っていて、何をしゃべっていたのかも覚えていない。それくらい舞い

上がっていた。覚えているのは、彼女の横顔。ショーケースの中を指さしての微笑み。
「こうして夜歩くのは初めてよね。なんだか恋人みたいじゃない？」
「そ、そう……ですか？」
ずっと憧れていた女性から告白され、二人きりで肩を並べて歩いている。それだけでも女性経験の少ない孝は頭に血がのぼってしまっている。
「暦美がうらやましいな。こんな弟クンがいるんだものね」
「えっ、えっと……そんな大したものじゃないです」
途切れがちな会話。はっきり言って由香理の気遣いだけで成り立っていて、自分が子供だと痛感させられる。しゃれた話題ひとつうまくこなせないのが悔しかった。
第一印象は、格好いい女性だった。比較的おとなしい、おっとりとした姉とはまるで反対の、活動的で背の高い女性。妹がいるとかで年下の扱いに慣れているみたいで、気遣いのできるひと。少年の目にはいつでも彼女は輝いていた。
「くすっ。本当に家の前まで送ってくれるのね。まるで本物の彼氏みたい」
アパートの階段の前で由香理が笑った。彼氏という言葉に過剰に反応した少年がとっさに動けないうちに、年上の女性は距離を詰めていた。まっすぐに向かい合った形で、ショートカットの似合う長身の女性が微笑んでいた。

「あのね。私の本当の彼氏になってほしいな。孝君。私のこと、嫌い？」
色素の薄い瞳がきらきらと輝いている。美しいと思う。いつも綺麗な由香理だけれど、今日は特別に綺麗だと思う。アパートの入り口の明かりは十分な光量で、彼女の頬がかすかに赤くなっているのまで照らし出していた。
「そ、それは、好きです。その、ずっと憧れてました」
年上の女性。姉の親友。格好よくて優しい大人の女性。手の届かない憧れだと、ずっと思っていた。でも、その女性が今、驚くほど近くにいた。
「私も好きだよ。同じだね、孝君。嬉しいわ」
にっこりと微笑むと、両手を広げて誘ってくる。もう逆らえない。彼女を抱きしめると、身体の奥底から熱いものがわき上がってくる。腕の中に、由香理を感じるのがすごく幸せなことだと、心の奥から納得していた。
お互いの頬が密着していた。それだけで幸福感が押し寄せてくる。
「それじゃあ、これから二人は恋人同士。いい？」
「は、はいっ。……ん、んんっ――」
耳元での囁きにうわずった声で答えると、そのまま口をふさがれてしまった。お互いの唇が密着している部分から溶けて崩れてしまいそうだ。ただ抱き合い、唇を重ね

ているだけで天にも昇る心地だった。

翌日、由香理と二人で報告すると、暦美は頓狂な声をあげる。本当に目が丸くなっているのが、彼女の驚きを表現していた。

「タカちゃんと、由香理ちゃんがおつきあいするの？　びっくりだわ」

「あら、暦美は反対なの？　そうだとすごく困っちゃうわ」

「ち、違うの。反対じゃないのよ。すごくびっくりしちゃって」

あわてて手を振って否定してみせる姉は、明らかに困惑していた。

「そういう可能性があるってことはわかっていたけど、突然だったから」

「暦美、ごめんね。昨日、孝君に送ってもらったときに、ね」

別に彼女が悪いわけではないのだが、やはり後ろめたいものがあるらしい。

「そ、それよりさ。どちらから先に告白したの……って、やっぱり由香理ちゃんね」

態度に出ていたらしく、あっさりと見抜かれてしまった。ちょっと頬を膨らませた姉は拳固を固めて可愛い仕草でふりあげてみせた。

「だめじゃない。好きあってるんだから、男の子から言ってあげないと」

「ううっ、反省してます」

正直なところ、最初から最後まで由香理のペースだったと思う。はっきり言って勝てる気はしないけれど、それでもいいと思っている自分がいた。

「あたしのタカちゃんが由香理ちゃんにとられちゃった……」

暦美が情けない声を出した。うるうると目に涙をためると、黒目がちの目が小動物的な雰囲気を演出する。

「い、いや。そういうものじゃないでしょ、姉さん」

甘えモードに入っているときの姉は、とても成人している女性には見えない。

「だいたい、あたしがフられた直後に親友と弟がデキちゃうってどういうことっ」

暦美がわざとらしい泣き真似をしてみせる。ロングヘアのおかげか、こういったポーズがひどく似合う。

「まあまあ。私たちがつきあうようになったのは、暦美のおかげなんだから」

由香理が泣き真似をする暦美の頭をなでなでする。こうしていると、なんだか姉妹みたいに見える。顔立ちが似てるわけでも、性格が似ているわけでもないのに、なんだかすごくしっくりとしていた。

「なんか複雑な気分。でも、ほかの女性にとられちゃうよりはいいかなあ」

泣き真似はそこまでだった。よよと泣き崩れるポーズから一転して笑顔になり、弟

の頬を指でつつく真似をする。
「タカちゃん、由香理ちゃんを泣かせたらだめよ。あたしの大切な親友なんだから」
「ぼ、ぼくにだって、その。由香理さんは大切だからっ」
そう口には出してみたものの、姉や由香理のほうに顔を向ける勇気はなかった。まだ高校生の少年は、それだけで真っ赤になっていた。
「あははは。これなら大丈夫かな。由香理ちゃん、タカちゃんをよろしくね」
「はい。よろしくされました。お姉さま」
「くすくすっ。何よ、それ。由香理ちゃんったら」
笑いあう二人は、いつもと変わらない。この二人のやりとりはいつでも、孝にとってはかけがえのない貴重な時間だった。

あのアパートの前での出来事から、少年の世界は一変していた。
「いきなりラブラブねえ……しかたがないけど」
姉が呆れても気にならない。彼女のことを考えるだけで心が高揚して、幸せな気分になれる。さすがに初恋というわけではないが、恋が成就するというのは、これほど幸せなものなのかと思う。世界がぐっと広がって、明るくなっていた。

「タカちゃんには彼氏にフられたばかりの姉をいたわる気持ちがないのかしら」
「それでぼくや由香理さんが遠慮したら、姉さんは嬉しいの？」
「そんなわけないじゃない。だから祝福してるのに。複雑な気分だわ」
マンガだったら大げさな涙が描かれそうなそうな泣き真似だ。
「ほら。髪が乱れてる。ハンカチとか、ちゃんと持ってる？」
上から下まで、暦美のチェックは厳しい。なんでも、相手が親友だからこそ譲れないものがあるのだそうだ。
「はい、いってらっしゃい。女の子を待たせちゃだめよ」
両親が旅行に出かけているためか、姉と顔を合わせている時間が普段よりも多い。洗濯に炊事、掃除とこなしながらも姉は嫌な顔ひとつしない。手伝おうと言っても、いらない邪魔、の一言ではねのけられてしまった。
孝が中学生の頃、父親が交通事故で入院したことがあって、そのとき以来暦美は家事をきっちりこなせるようになっていた。
「それじゃあ、いってきます」
「はい。いってらっしゃい、タカちゃん。気をつけてね」
掃除の途中だった暦美はエプロン姿で、ドキリとしてしまった。板についていると

はいえ、まだ二十歳の姉は所帯臭さなどまるで無縁で、新鮮そのものだ。むしろ新妻という言葉が似合いそうだった。

「う、うん……」

普段はこんな送られかたをすることがないせいか、妙にドキドキする。世の中の新婚男性はこんな感じで毎朝送り出されるのだろうか。

このまま出かければ恋人となったばかりの女性との時間。二人きりでの、濃密な、瞬く間にすぎてしまう貴重な時間が待っている。孝がそちらに気を取られていたのも無理はないだろう。姉の瞳に、悲しげな光がさしていることには気づけるはずもなく、少年は明るい初夏の空の下に足を踏み出したのだった。

「で、これはなんなの？　シスコンの孝君」

恋人の視線は冷たかった。その視線の先にあるのは、孝の提げている小さめのトートバッグだ。シンプルだが、妙にかわいいデザインでけっこう膨らんでいる。

「え、ええと。お弁当……です」

「どこの世界に恋人との初デートに、姉のお弁当を持ってくる彼氏がいるのよ」

あまりにもっともな指摘に、思わず首をすくめてしまった。それくらいに年上の恋

人の怒気は激しかった。当たり前なだけに、弁解の余地もない。
いつもと変わらないようでいて、バッグやアクセサリーが若い女性らしいものになっている。ピアスもシンプルだけれど綺麗だ。そんな、おしゃれをしてくれている彼女は、明らかに怒っていた。
「ごめんなさい……断れませんでした」
「ま、いいわ。朝早くに暦美からメールがあって、お弁当カブらないですんだし」
ふん、と髪をかきあげながら視線をずらしたときにはもういつもの彼女に戻っていた。かすかに鼻の頭が赤い。彼女もお弁当を作ってくれるつもりだったのだ。ショートカットの栗色の髪がサラサラと流れ、青い空に映えた。
「それに、暦美のお弁当はおいしいしね。許してあげる」
にっこりと笑うと、手をつないでくる。どうやら勘弁してもらえたらしい。色素の薄めな瞳の光が柔らかくなる。活動的な服装なのはいつもと変わらないけれど、ミニスカートもジーンズ地ではないし、シャツの重ねかたもいつもよりあか抜けた感じだ。
「暦美からの、ごめんなさいメールもあったしね……ふふふっ。あの娘ったら」
由香理の手は柔らかくてしっとりとしている。滑らかな手触りに幸せな気分を感じながら、待ち合わせの駅改札口を後にする。

「あの、姉さんは、なんて？」
「気にしなくていいわ。ただ、これからはお弁当は私にまかせてね。孝君」
今日腕を振るえなかったのがよほど悔しいのか、釘を刺されてしまった。
「それじゃあ、行きましょう。いきあたりばったりだけど、いいわよね」
映画から始まって、公園の散策、公立の美術館の無料展示。美術館が入っているあたりが高校生のデートとはひと味違う。年上の恋人のありがたさだった。
「有料展示じゃなくても、けっこう楽しめるでしょう？　空調利いているしね」
「はい。ここ、穴場ですね」
美術館のエントランスは公園のようになっていて、オブジェを見ながら休憩できるようになっている。見ているだけで不思議な気分になる立体造形を見ながら食事をするのも新鮮な気分だった。
「さすがに暦美は料理うまいわね。ちょっと悔しいけど」
姉の作ってくれたお弁当はカラフルなミニおにぎりを中心とした、見た目にもかわいいものだ。ポップな色調の風呂敷をランチョンマットがわりに広げると、ベンチが豪華な食卓と化していた。
「唐揚げは……ふむ。お酒と、しょうががポイントね」

「すごいですね。わかるんですか？」
「ふふふっ。当然。次はきっと孝君をびっくりさせてあげるんだから」
由香理の料理の腕前もなかなかのものだ。以前には二人が二人ともお弁当を作ってきてくれて、孝はお腹が破裂しそうになるまで食べたことがあるくらいだ。
「あ、由香理さん、あそこにぼくらが映ってますよ」
「本当だ。変な顔に映ってる。おもしろい」
いくつかあるオブジェのひとつはステンレスの鏡面仕上げで、表面のかすかな曲面が風景を不思議な曲線に変換して映し出している。二人のちょっとした動きで映像は不規則に変化し、コミカルに、そして不思議な形に二人の姿を変えながら映し出していた。
「何これっ。孝君、すごい変な顔っ」
「ゆ、由香理さんだって、なんかすごいことになってます」
映し出された映像に合わせて身体を動かしたり、表情を変えたりして千変万化する映り込みを楽しんだ。そんなただ笑いあうだけのことが、心を高揚させてくれる。ただ彼女と時間を共有するだけで幸せな気分になれる。
「あ、猫……」

視界を黒猫が横切ったと思ったら、オブジェへの映り込みだ。何かと思えば、由香理の脚に猫がいた。肌色のストッキングに、黒猫が織り込まれているらしい。
「あ、気づいてくれたんだ。光の加減で、猫が浮き出して見えるのよ、これ」
照れ笑いを浮かべながら、ふくらはぎに織り込まれた猫の姿をなぞる。それはちょうどジャンプしようとしている姿だった。
「む、エッチな猫ですね。けしからん」
「え、なんで？　なんでエッチなの？」
「だって、この猫、由香理さんのスカートの中にジャンプしようとしているもの」
そんなくだらない話題に、お腹を抱えるくらいに笑える。いつもとはやっぱり違う空気を感じていた。
「あのね、いいかな？　その口調、やめてほしいの。敬語はイヤだな」
しばらく馬鹿なやりとりをしたあと、年上の恋人が少し不満そうな顔をしていた。
「う、うん。それじゃあ、そうするね」
さっそくなおしてみたけれど、やはりすぐにはしっくりこない。言葉だけ対等になっても、二人の関係は対等とは言えない。年齢だけじゃなく、もっといろいろなこと。少年がいかに手に入れたくても、一足飛びには手に入らない。

「さて、それじゃあ買い物をしたら、ウチに行こうか。ご飯、作るね」
「いいの？」
「もちろん。気ままな一人暮らしだもの。遠慮しないで」
彼女のアパートの前までは幾度か行っているが、部屋の中まで案内されたことはない。姉以外の女性の部屋に招待されるのは初めてのことだった。
「ワンルームだから、あまり期待されても困っちゃうけどね」
スーパーで食材をチェックしながら由香理が笑う。お弁当のための食材が残っているので少しの買い物でいいらしい。
「お弁当で使わなかった唐揚げ用の鶏肉をメインにしちゃおうかな」
由香理の部屋は学生向けのワンルームだった。ベッドの向かいにパソコンデスクがあり、テレビの前にはラグが敷いてある。小さな折り畳み式のテーブルが食卓だった。
「うわあ、さすが由香理さん。おいしそうだ」
調理家電の音がすると、じきに美味しそうな香りが部屋に広がった。
「ふふふっ。お口にあうと嬉しいな」
ハーブやカレー粉で彩られた鶏肉が綺麗に焼きあがっている。スープはインスタントのスープだが、スパイスなどで味が整えられ、先ほど買ってきた具材が華やかだ。

若い男の胃袋にふさわしいボリュームが確保されているのもありがたかった。
「うん、おいしかった。ごちそうさま」
「お粗末さまでした。でも、食べるのは夕食だけ？」
食器を重ねながら由香理が意味ありげな笑みを浮かべた。ちょっと首をかしげる仕草が色っぽい。かすかに身体をひねるだけで魅惑的なボディラインがくっきりと浮き上がり、童貞少年の心臓が大きく跳ね上がる。
「ここに本当のメインディッシュがあるのよ、孝君？」
さすがに言葉の意味は通じた。食器を下げる年上の恋人のみっちりと中身の詰まった胸元が悩ましく、鼻血が出そうなくらいだ。すっきりとした二の腕も柔らかそうで、締まった腰を抱き寄せたい衝動に駆られる。
「洗いものしちゃうから、先にシャワーを使ってね」
シャワールームはトイレと一体のユニットバスだ。自宅の浴室に比べると一回り以上も小さいけれど、機能的な感じもした。綺麗に掃除されていて、タオルもすでに用意されている。彼女が最初から考えていたことが伝わってくる。
（きょ、今日……しちゃうんだ、由香理さんと……）
想像するだけで股間のモノが火の柱のように熱くそそり立つ。ボディソープを身体

にまぶすようにして洗い、顔を、頭を洗っていくのに、肉棒はまったく収まる気配がない。自分の浅ましさを思い知らされた気分だった。

シャワーを浴びたあと服を脱いでいればいいのか、それとも着るべきなのかもわからない。友人同士のワイ談にも、肝心なところがないことに気づく一瞬だった。結局、何も着ないでタオルで下半身だけ隠すことにした。

「それじゃあ、少しだけ待っててね。孝君」

入れかわりにシャワールームに入る由香理が頬にキスしてくれた。股間の状態には気づかないふりをしてくれるのがありがたいが、唇の感触でさらに問題のモノは勢いを増してしまっていた。ビクビクと震え、妙に重量感を増して熱くなっている。

「おまたせ。退屈じゃなかった？」

「ううん。こうして待っているだけでも、正直ドキドキしてるから」

バスタオルを身体に巻き付けただけの彼女は綺麗だった。熱いお湯を浴びてほんのりと赤く染まった瑞々しい肌。むっちりと張りつめた太腿とバスタオルの間の影がやけに色っぽい。照明の下でくっきりと刻まれた胸の谷間は初めて見るボリュームで少年の視線を引きつけていた

「孝君は、やっぱり初めてなの？」

ちょっと照れくさそうに微笑むのが、また魅力いっぱいだ。髪の毛が湿って頬に張り付いたりしているのに色気を感じる。長身なだけあってバランスのとれた身体が迫力満点の膨らみを、布一枚の下に隠している。

「うん。由香理さんが初めてに……なってくれるんだね」

「そうね。孝君の初めて、私がもらっちゃう」

そう言いながら由香理がベッドに腰掛けると太腿の付け根まで見えてしまいそうで、思わず喉が鳴ってしまう。クスリと笑った由香理の手招きに応じて彼女の隣に座り、そのまま唇を重ねた。

「ん……んむ、んんっ……」

シャワーを浴びたばかりのしっとりとした肌の柔らかさが、温かさがバスタオルごしに伝わってくる。背中の肌の滑らかさ。触れる頬の、唇の溶けてしまいそうな柔らかさ。張りつめた身体の量感。すべてが男の欲望を刺激し、高ぶらせていく。

シャンプーとボディソープの香りに混じって、若い女性の甘く優しい体臭が若者の興奮を一気に引き上げる。腕の中の女性をさらに生々しく、間近に感じていた。

密着した唇だけでも気持ちいいというのに、チロチロと、ぬめぬめした舌が唇を探ってくる。口を探られるだけで力が抜けてしまいそうだ。

「んっ、んんむっ、むぐっ、んんんっ――」
進入してきた由香理の舌が孝の舌を探りあてると、優しくマッサージするように撫で回してくる。ゾクリとしたところで、密着した粘膜を吸い上げられ、今度はぬめつく舌をからませてくる。舌が、口が溶けてしまいそうに気持ちいい。
濃厚なゼリーのゼラチン質のような柔らかさとしなやかさ。ねっとりと微細な凹凸にも密着してくる快美感。ただキスをしているだけなのに、これほど激しく多彩な快感があるのを、少年は初めて知り、驚きながらも快感の中にのめりこんでいた。
「んんふっ、んっ、んあっ、んんん……」
抱き合ったままの由香理の手が背中に回されるだけで、ぞわっと背筋の毛が逆立つような感覚があった。お互いの肌を、身体の感触を確かめあいながらの接吻は驚くほどに官能的で、舌を絡め、口腔を探りあうと全身に熱い血流がめぐり、欲望と快感の炎が男の本性を焼き焦がし、燃え上がらせる。
甘美な痺れが毒のように全身に回るのを感じながら、必死になって相手の唇に舌を這わせ、吸い上げる。舌と舌が、舌と歯茎が触れあい、お互いの唾液をからませながら探っていくのはめくるめく快感だった。
「ん……孝君、上手になったね、キス。私も感じちゃったよ」

「そ、そうかな。夢中なだけなんだけど」
感じたといいつつも彼女のほうが余裕があるのも悔しい。経験では及ばないのはしかたがないけれど、彼女にももっと感じてほしいと思う。腕の中の豪奢な重みが、快感に悶え、震えわななくのが見たい。彼女の声が悦楽に震え、途切れ、かすれるのを聞きたいと心の底から思う。
「もっとさわっていい？」
「もちろんよ。私の身体を自由にできるのは、孝君だけ……あんっ」
クッションが豪華な重みを受け止め、ベッドがかすかにきしんだ。由香理を押し倒したまま、彼女の髪に顔をうずめるようにして耳元に囁く。
「由香理さん、好きだよ……」
「うふふ。嬉しい。私も、好きよ。ずっと好きだったんだから」
柔らかな身体を覆っているバスタオルの前を開くと、初めて直接目にする若い女性の美しく複雑な曲面で構成された魅惑的な姿態が露わになった。お互いの呼吸が一瞬止まったのを意識しながら柔肌へと手を伸ばしていく。
「あ……優しくしてね。優しくしてくれれば、何をしてもいいから……」
もちろん、乱暴にするつもりなどない。彼女を気持ちよくしてあげたい。そして自

分も気持ちよくなりたい。それだけだ。頷いた少年は逸る気持ちを押さえながら二つの肉の丸みに手を伸ばしていく。
「すごいな。やっぱり、大きい……」
「くすっ。大きいだけじゃないのよ。ん、あんんっ」
指で触れた瞬間、かすかにたわんだ肉球全体が震える。弾力に満ちた魅惑的な光景だ。そのまま両方の乳房を包み込むようにして手を添えていく。
指が食い込む感触に頭が真っ白になった。大きく伸ばした指からも余るボリュームたっぷりの乳房にむしゃぶりつく。綺麗な半球が自重でわずかにたわみ、絶妙な曲線を描きながら揺れているのに血が熱くたぎった。
「すごく柔らかくて、気持ちいいよ」
「うん……私のおっぱいも、いっぱい可愛がってね」
指を押し返してくる弾力と温かみ、指に吸いついてくるような柔らかさと滑らかさ。つきたてのお餅を手で丸めているときのような感触と言えばいいだろうか。もち肌という言葉の意味がわかった気がした。
指を食い込ませれば、高まる内圧が感触をさらによくしてくれるし、撫で回し、こね回せば柔らかくすべすべした肌と乳肉がたまらない心地よさだ。手の中で震える彼

女の声と体温がたまらなく愛おしい。
「あんっ……」
乳首を摘むとかすかな喘ぎが唇からこぼれた。ぷっくりと色づいた突起は指で挟むようにして刺激するとみるみるうちに固く大きくなっていく。柔らかい乳房の頂点にある固い突起は、それだけでも魅惑の象徴だ。自分の指で固く変化していくのがおもしろく、また愛おしい。
「ち、乳首ばっかり……んあっ、あっ……」
乳首の感触がみるみるうちに変化するのがおもしろく、可愛い。特に敏感な乳首と、乳輪を指先でくすぐるだけで恋人の全身に反応があるのが誘惑的だと思う。乳輪もまた乳首と一緒に硬くなるのが発見だった。乳首の勃起とともにかすかな凹凸がくっきりと感じられるようになる。
「なんだか可愛いから。ほかのところも、触るね」
頬に触れるとそれだけでビクリと反応するのに新鮮な驚きを覚えた。こんなところまで敏感になるとは思ってもいなかったからだ。そのまま撫でてやるとプルプルと震え、首をすくめている様子が子猫のようだと思った。
「すごい敏感だね。なんだか嬉しいな。可愛いよ、由香理さん」

「なんだか感じすぎちゃって、恥ずかしいの……ふあっ、ああっ」
首筋から肩へと掌を滑らせるだけで由香理の声が震えるのが可愛くて、その喘ぎをいつまでも聞いていたくなる。引き締まった脇腹を、滑らかなお腹を掌で撫で回すだけで彼女は敏感に反応してくれて、その声を聞くごとに股間の肉棒がより固く、より熱くなっていた。ビクビクと震えながら、先端に汁をにじませる。
すでに男根は臨戦態勢だ。硬度も十分で、たとえ女性の胎内に進入しても大丈夫だろう。問題は興奮しすぎて、暴発してしまいそうなことだった。
（い、今入れたらあっという間に発射しちゃうぞ。それは格好悪いなあ）
幸い、恋人も感じてくれている。もうちょっと時間を稼いでみることにした。
「あん……く、首筋弱いからっ」
頬から首筋へと、キスを連続しながら位置をずらしていく。それだけで感じやすい肌が震え、唇に甘美な感触を伝えてくる。一度はシャワーを浴びて薄くなった若い女性の身体の甘い香りが、身悶えとともに匂い立つ。
「弱いって言ってるのにぃ……い、意地悪うっ」
「だって、由香理さん可愛いから、したくなっちゃうよ」
責めるような口調にも、女の甘えが入っている。そんなところも可愛くて、彼女の

全身に触れ、撫で回し、柔らかくも刺激的な肉体を隅々まで味わいたいと思った。
「あ、あのね。孝君。もう、私大丈夫だから、きても……いいよ」
「ぼくも気持ちいいけど、なんだか由香理さんが可愛いから」
もちろん童貞喪失はしたいのだけれど、今挿入したら、彼女の敏感さ、可愛い喘ぎ声を味わえなくなってしまいそうな気がする。自分はきっとセックスの快感に夢中になって、ほかのことに注意が向かなくなりそうだ。そして何より暴発が怖い。愛しい女の中で、あっという間に果ててしまう恥辱はごめんだった。
「う……童貞のくせに、孝君、余裕あるんだ。なんだか悔しい……」
「い、いや。余裕とかじゃなくて、その。もっとこのままいたいっていうか」
顔を真っ赤にしたまま不満そうな表情を浮かべた恋人が、しなやかな腕を伸ばしてきた。巻いていたバスタオルをめくり上げると固く屹立しているモノがあった。
「うっ……い、いきなり」
初めて他人の目にさらす羞恥は、それ以上の快感に押し流されていく。自分のモノを他人と比べたことなどないけれど、どうなのだろうか。そんなことを思う間もなくしなやかな指がペニスを捕らえていた。
「くすっ。捕まえたわよ。生意気な孝君におしおきしてあげなくちゃ」

自分以外の手の感触。それは衝撃だった。さらりとした柔らかい掌が触れるだけで電流が走ったかのような瞬間的な脈動がおこり、ペニスがビクビクと震える。その震えが肉棒をこすりつけることになり、さらなる快感を呼ぶ。

「くううっ、あっ、あううっ」

「あっ、あんっ……ふふっ。孝君だって敏感じゃない」

身体を起こした由香理が愛しげにペニスをさすりはじめた。しょせんはまだ未経験の肉棒はそれだけで先端から涎をだらだらと流し、快感にヒクついてしまう。

「そ、そりゃあ初めてだし……って、くっ、気持ちよすぎるっ」

「くすくすっ。敏感なオチンチン、可愛いっ。思いきりかわいがっちゃうっ」

可愛いと言われるのは複雑な気分だが快感には逆らえない。今までただ勃起するだけでなんの刺激も与えられなかったペニスが、おあずけをくらっていた犬のように激しく反応し、ヒクついていた。

「うっ、うわっ……由香理さん、気持ちいいけどっ……」

亀頭を包み込むようにした掌が軽くこすりあげるだけで身体が震えそうな快感が広がっていく。もう一方の手が指で輪を作るようにして竿を優しく握り、軽く上下するとみるみるうちに射精感が高まっていく。

「そ、そんなにされたら、すぐに出ちゃうよっ」
「出しちゃっても、いいのよ。孝君のオチンチン、ヒクヒクして可愛いな」
すっかり攻守逆転されてしまった。うかつに身体を動かすとあっという間に射精まで導かれてしまいそうで、身動きもできない状態だ。
「すごい敏感。トロトロしたのが、いっぱい出てくるよ」
「ゆ、由香理さんがそうしているんじゃないか……ううっ」
彼女の手の中のペニスはまるでリミッターが外れたかのような激しい快感を発生させていた。指がカリに軽く触れ、竿を優しくしごくだけでも気持ちいい。断続的に放たれる快感のパルスが脳髄をぐずぐずに崩していくようだ。
柔らかくすべすべした掌が、指がカリをくすぐり、亀頭を撫で回すだけでも心地よいのに、もう一方の手を竿に添えて、握りしめてくるのがたまらない。
「くっ、ううっ」
「意外と我慢強いのね。素敵よ、孝君。もっと気持ちよくしてあげる」
身体を入れ替えて今度は由香理が上になった。孝の脚を開かせると、その間にひざまずき、男の股間にそびえ立つモノに顔を寄せていく。
「くすくすっ。ヒクヒクしてる。今、私のオクチでしてあげるからね……」

ちゅっ、と小さな音とともに電流が走った気がした。由香理がペニスにキスをしたのだと気づいたときには、吸い上げられる亀頭粘膜がびりびりと痺れていた。
「くうっ、んっ、んんくっ……こ、こんなにいいなんてっ」
学校の男子学生のワイ談からは想像もつかない鋭く、しかも激しい快感に肉棒が疼き、破裂しそうなほどに勃起してしまっている。ゼラチン質を思わせる唇のねっとりとした感触が少年のモノを包み込んでいく。
「んんっ。すごく……ヒクヒクしてるわよ……んちゅっ」
くちゅくちゅと女の唇から淫らな水音がこぼれる。整った顔立ちが男の肉棒をくわえ込んでいやらしくゆがんでいるのに背筋がゾクリとした。
（ゆ、由香理さんがぼくのチンポをくわえてる――）
いやがる女性もいるという話なのに、由香理はむしろ嬉しそうに、熱心にしゃぶってくれている。亀頭を唇の滑らかな感触が滑っていくだけで身震いしたくなる。ザラつく舌が唾液のぬめりとともに舐め回してくるのがたまらない。
「んんっ、い、いふれも……らひれ、いいから……」
唇や頬の肉厚を生かし、すっぽりと包み込みながら締め付けてくる。ザラザラした舌がカリの裏までもからみついてくるのに、思わず首をすくめてしまった。バキュー

ムをきかせて吸い込まれ、内圧に弾けそうなほどの快美感を感じる。
「うっ、うん。これじゃあ、我慢できないよ。す、すぐに出ちゃいそうだっ」
鈴口からはトロトロと際限もなく先走りの粘液が出つづけているのに、すぐに淫らな舌の動きに舐めとられ、吸いとられてしまう。その快感は腰がひけてしまいそうになるほどで、すでにペニスはヒクヒクと痙攣を繰り返している状態だ。
「いっぱい、らひれれ……んんっ、んっんん、んちゅっ」
年上の女性の、経験を生かしたフェラチオは童貞少年では太刀打ちできないほどで、竿の部分をリズミカルに締め付けながらしごかれるだけでも射精感が高まってしまうというのに、肉厚の唇が亀頭を包み込み、こちらもいやらしくしごいてくれるのだ。ザラつく舌の感触とあいまって、肉棒全部がとろけてしまいそうだった。
「もっ、もう……出るよっ、由香理さんっ」
言うまでもなく彼女はわかっていた。少年の反応から、爆発が近いのを察していたのだろう。ひときわ深く口中にくわえたと思うと、強烈なバキュームをきかせながら頭を上下し、唇で激しく亀頭をしごきあげたのだ。手で竿をしっかりと握りしめながらの上下運動が快感を一気に加速させていく。
「くあっ、うっ、ううっ……い、いくよっ」

激しい痙攣とともに肉の柱が弾け、高ぶる欲望が熱い樹液となってほとばしる。青臭い、若い雄の精気のこもった白濁した液体が飛沫をあげながら噴き上げる。
喉の奥にぶちまけられるスペルマを、年上の恋人は必死に受け止めていた。激しく噴出するスペルマに苦しそうな表情を浮かべながらも吸い尽くそうとする。
「んくっ、んっ、ンンッ――――」
射精の間すらも由香理の指は巧みに動いていた。肉竿と陰嚢を包み込むようにしながらやわやわと刺激し、絞り尽くそうとするかのように軽く握り込んでくる。
「うっ、くううっ……。ゆ、由香理さん、飲んでるの？」
「んんんっ……。孝君のだもの。もったいないものね。全部飲んじゃった」
枕元に用意されていたボックスティッシュから一枚とると、口元をぬぐう。それだけの動作も魅力的に見えた。フェラチオをしてくれて、しかも精液を飲み下してくれる。由香理の愛情の深さが伝わってくる気がした。
（全部、飲んでくれたんだ）
精液がおいしいものでないことくらいは知っている。それを飲み下したばかりか、丁寧に清めてくれるのが嬉しかった。
「うふふっ。さすがだね。一度出してもビンビンじゃない」

「うん。気持ちよすぎて、小さくなる暇がないみたいだ」
「くすっ。今度は、私のここを気持ちよくしてほしいな……」
そう言いながら、年上の恋人が少年の手をとり、自分の下腹部へと導いていく。なだらかな、引き締まった下腹部の下には恥丘の隆起があって、そこは髪の毛よりは濃いけれど、やはり栗色の繊毛に飾られていた。
「孝君のおかげで、私も感じちゃってるの。このまま気持ちよくしてほしいな」
初めて見る肉の花はかすかに潤んでいるようだ。思わず唾を飲み込みながらそっと触れていくと、せつなげなため息がこぼれるのが可愛いと思う。初めての肉の花の香りが若者の興奮をさらにかきたてていく。
「う、うん。こんなになって、感じてくれてたんだね。ぼくも嬉しいな」
彼女の秘部は、すでに熱くとろけていた。指を沈めると肉ひだが優しく締め付けてくれるのが心地よい。じっとりと濡れた粘膜の感触が男の本能を刺激し、初めての感覚がここに肉の槍を突き立てたいという欲望に変わっていく。
「それじゃあ、来て。孝君を、いっぱい感じさせてね」
潤んだ瞳は欲情に濡れ輝いている。ベッドに身を横たえたまま、少年の手に合わせて脚を広げる女体は美しく、そして淫らだった。いやらしいけれど、今日一番綺麗だ

と思う。白く滑らかな肌も、よくくびれた腰も、誇らしげに揺れる胸の膨らみも。すべてが美しく、そして少年を誘っている。
「それじゃあ、いくよ……」
「うん。ここ。ここから来て……」
ペニスに手を添えて進入口を探る。由香理がペニスの先端をさらに指で導いてくれる。秘肉をかきわけたさらに奥の一点。かすかに抵抗の弱まる部分を見つけ、そこに力をかけていく。
「あっ……」
かすかに触れただけでお互いの分泌する淫液が触れあい、ねっとりと糸を引くのがわかる。すでに二人のモノはたっぷりの分泌液で濡れ、準備万端だ。
「あんっ……そ、そこでいいの。ゆっくり、来て」
すでに熱く濡れそぼった女性器に触れるだけでペニスが大きく反応し反り返る。普段の彼女とは明らかに違う誘惑的な香りを楽しみながら腰を突き出していく。
「う、うん。くっ、ううっ……」
肉柱に反応した媚肉がきゅっと締める。肉の壁を割り裂いて奥に入り込んでいく感覚。今まで手でしか触れられたことのないペニスは全周方向からの快感に大きく痙攣

し、膣壁の締め付けに反応して脈動した。
初めての女性の肉体は、触れるところすべてが甘美で官能的だった。男性にとって憧れの象徴である乳房はもちろん、肩が、二の腕が、太腿が、腰が。すべてが心地よい感触を返してくれた。敏感に反応し、いやらしくも淫らな喘ぎを紡いでくれる。
「あっ、あんんっ……入ってくる。孝君のが、入ってくるよぉっ」
断続的に締め付けてくる秘洞の入り口から、淫らな音とともに泡立った粘液がこぼれる。ヌプヌプと淫らな音が若者の耳をくすぐり、熱くぬめった粘膜の起伏が若者のもっとも敏感な部分を受け入れ、優しく、ときに強く締め付ける。
「んあっ……た、孝君の、感じる。私の中でヒクヒクしてる……」
男のものにかき回されながら、女の器官は歓喜に震えながら男のものを受け入れ、ぴっとりと肉茎の形状に追従し、包み込んでいく。文字通り優しく柔軟で、そして潤っている彼女の内部は、ただそれだけで感動だった。
「由香理さんの中、気持ちいいよ。す、すぐに出ちゃいそうなくらいっ」
まだペニスが半ばほども入っていないというのに、これ以上の挿入が怖いほどに気持ちいい。女性の身体は入り口部分が特にきついというが、運動もする由香理の中は特にきついのかもしれない。

「す、少しずついくよ」
いきなり激しくするとあっという間に絶頂まで押し上げられてしまいそうだ。先ほど恋人の口の中に放出していなかったら、文字通り三こすり半で射精してしまっていたかもしれないくらいだ。
「うん。孝君が私の中にいるの、すごく幸せ。孝君がいいようにしてね」
彼女の脇に手をつくと、腕をからめるようにして触れてくる。それだけで背筋がゾクゾクするような快感が走った。見上げてくる瞳が潤んでキラキラと輝いている。激しい快感と興奮に上気した肌が色っぽいと思う。
「ああっ……入ってくる。孝君のが、入ってくるよぉっ」
唇がせつなげにほころび、普段の彼女の歯切れのよさからは考えられないほどに湿った、淫らな声がこぼれる。普段の彼女が活発で、淫らなものを意識させない服装とのギャップが、少年の快感を底上げしていた。
ペニスのカリにかかる圧力と快感が瞬間的に減少して、今度は竿に快感の中心が移った。入り口の締め付けが竿をこすりあげ、しごかれる快感に睾丸が反応し、カウパー氏腺液がペニスの先端から漏れ出るのがわかった。
「あんっ……お、奥まできて。私の一番奥に孝君が欲しいっ」

「うんっ。ぼくも由香理さんの奥を感じたいよっ」
押し寄せる快感に耐えきれなくなったのか、いつの間にか由香理の目が閉じられていた。意外なほどに長いまつげにドキリとする。普段は目を強調するメイクなどしていないけれど、マスカラとかをつけたら変身してしまいそうだ。
お互いの吐息が熱く、そして早まっていく。二人の体液が解け合い、混じりあい、泡立ついやらしい音がねっとりと耳にからみつく。
「はあっ、はあっ、はあっ――」
甘美な肉層がペニスにからみついてくる感覚がたまらない。入り口のきつさが竿を締め付けると同時に、膣道全体が敏感な亀頭を舐めあげるように刺激してくる。しかも膣肉全体のうごめきが快感をさらに増幅し、童貞少年が身体を震わせるほどの刺激が、下半身の一点から全身に広がっていく。
「き、きたわ。孝君のが、私の奥にきてる……」
「これが由香理さんの一番奥なんだ。すごく、気持ちいいよ」
ちょうどペニスの根本まで肉壺に飲み込まれたあたりで先端に触れるものがあった。これが子宮だろうか。彼女の神聖な部分の、一番奥を征服した実感がこみあげてくる。
「んんっ……孝君のが、中で暴れてるのがわかるわ」

「暴れてるって。由香理さんの中が気持ちよすぎるからだよ」
眩しそうに少年の顔を見上げた由香理が、ふと目をそらした。
「嬉しい、けど……」
「どうしたの？」
彼女の中は優しい。少年の凶暴な欲望を迎え入れ、受け止め、包み込んでくれている。まるで身体全身を包まれているような快感だった。
「……初めてじゃなくて、ごめんね。私、言えなくて……」
小さな声。彼女がそんなことを気にしていたのは孝にとっては意外だった。由香理ぐらいの女性であれば、周囲の男が放っておかないだろうし、彼女がリードしてくれなかったら、彼はすでに暴発し、初めての経験を苦いものにしていたかもしれない。
「ううん。由香理さんは由香理さんでしょ。ぼくは大好きだよ」
ただでさえ潤んでいた瞳に涙が浮かんだ瞬間。きゅうっと強烈な締め付けがペニスを襲った。入り口から奥までが連動しての収縮に心臓が跳ね上がりそうなほどに快楽中枢を強烈に刺激した。
「も、もうっ。そんなこと言われたら、感じちゃうじゃないっ」
身動きできないでいる少年の背に手を回した由香理がそっと引き寄せる。つながっ

たまま抱き合うようにして、彼女の胸に顔を埋める形になった。ふわりと乳房が優しく受け止めてくれる。頬に、唇が気持ちよかった。

「好きよ。孝君、大好きっ」

ヒクヒクと痙攣する肉壷はさらに大量に分泌された密液で潤滑されていた。反射的に動いてしまう腰の動きに膣肉が反応する快感の上昇スパイラルが生じていた。

奥に達したペニスをさらに押し込むと、女性器全体がクイクイと締め付けてくる。腰を後退させて半ばまで引き抜くと愛しい男を逃がすまいとするかのようにキュッと締め上げる。まるで別の生き物のような俊敏な反応だった。

「ううっ……由香理さんの中、すごいよっ」

運動も得意な彼女らしく、締め付けは強い。気を抜けば彼女の中で押しつぶされ、こね回されてしまいそうなほどの膣圧で、経験のない少年のペニスは年上の女性の中で翻弄されていた。

「うっ、し、締め付けが強いしっ。中が動いてるっ、くうっ」

動けば動くほどに細腰がうねり、白い肌がわななく。自分の動きで彼女が感じてくれていると思うと、どこまでも突き抜けてしまいたいと思った。

「ああっ、ん、はっ、はああっ、あっ、ああっ――」

淫らな水音が、二人の結合部から漏れる。初めての行為のはずなのに、身体はすべきことをわきまえていた。肉が肉を打つ淫らな音がする。腰を使えば使うほどにパンッ、パンッと破裂音にも似た音が二人の耳をくすぐる。

一突きごとにこぼれる由香理の声が脳髄を揺さぶる。喘ぎ声のひとつひとつが男の官能を押し上げていた。豊かに発達した身体全体が、彼女の反応のすべてが快感につながっている。

「ひゃうっ、うんっ、んっ、んあああ――っ」

普段の彼女とはまるで違う湿った声。淫らな声がこぼれるのと一緒に量感ある乳房が揺れる。すっかり突起した乳首が抽送を繰り返すたびに小さな弧を描きながら揺れていた。それにかぶりつき、吸い上げ、豊かな膨らみに顔をうずめる。

「ああんっ、んふっ、ふあっ、ああっあっ、あうっ」

かすかなベッドのきしみが、今まさに彼女としていることを実感させてくれる。淫らな音の高まりとともに、快楽曲線は急カーブを描いて上昇していく。

「孝君のが、いいのっ。すごくいいのっ」

由香理の中は大量の淫蜜に濡れそぼち絶妙な潤滑感覚を与えている。快感の高まった彼女の膣肉は奥のほうまでも食いしめる力が強くなり、先端部と根本の二カ所を同

時に攻められている感覚だ。
敏感な亀頭粘膜が膣内粘膜にこすりたてられ、締め付けられながら子宮口にぶつかる。竿は竿で入り口の締め付けにしごかれ、全体が肉悦の炎にあぶられている。
（な、なんだよ。これ。奥のほうまで締まりがよくなって……ううっ）
竿と亀頭がジリジリと快楽に焼き焦がされているような気がした。抑制の糸も炎にあぶられ、今にも切れてしまいそうな気がした。
「もっと、もっと突いてっ。激しいの、いいのっ」
彼女も激しい悦楽に理性を溶かされている。淫らに求め、身悶えていた。全身をわななかせ、声を、吐息を震わせながら快感と愛情を表している。ほの赤く染まった肌が凄艶で、目元まで染まっているのにドキリとした。
「うっ、うん。で、でも。ぼくがもう我慢できないよっ」
「いいよっ。孝君の、私の中にちょうだい。いっぱい出してっ」
せつなげな、喘ぎ声とともにおねだりする年上の恋人は、もう真っ赤になっていた。頬を上気させているだけでも色っぽいのに、身体をくねらせながら快感を全身で表現してくれるのがたまらない。
「ああんっ。な、なにこれぇっ。わ、私のほうが、先になんて、そんなあっ……」

ペニスにからみつく肉ひだが小刻みな収縮を繰り返し、たっぷりの潤滑液のおかげで摩擦感がせつなくも気持ちよく、いやらしい水音を響かせながら彼女の肉壷の奥底までも抉りぬく。

彼女が絶頂に達しようとしている。少年が気づいたときには射精衝動ももうぎりぎりまで膨れ上がり、今にも爆発しそうだ。身体の中が悦楽で満たされ、あふれ出てしまいそうだった。

「ぼ、ぼくのほうもすごく気持ちいいよっ。うぐっ、んっ、んっ」

激しくうねる細腰。シーツを鷲掴みにして快感をこらえながら彼女が頭を振る。綺麗な足の指までもが反り返り、プルプルと震えている。彼女ももう絶頂間近だ。膣肉が小刻みに締め付け、大量の潤滑液が結合部から滴る。痛いほどに膨張した海綿体全体が快感に震え、針で突いたら爆発してしまいそうだ。

「ああんっ、いっ、一緒がいいのっ。あっあああっ――」

むっちりとした太腿が、ふくらはぎが、足首がプルプルと震えながら年下の男の腰にからみついた。恋しい男の腰をくわえ込んで放さないとでもいうようにしっかりと足をからめている。

「うっ、うああっ。ふ、深いよ……奥まで、全体がっ」

腰にからみつく由香理の足のおかげで、結合がさらに深くなり、腰を使うたびに衝撃がペニスから脳天まで駆け上る。二段締めのおかげで肉棒は炎の柱のごとく熱くそびえ立ち、炎の槍のごとくに肉壷に突き立てられていく。

「ひゃおおっ、あっああっ。くるっ。来ちゃうのぉっ」

プルプルと女体が震えた。目を開くこともできないままひたすらに喘ぎ悶える女体に限界が近づいている。だが、孝自身の限界もそこまで来ていた。

全身全霊を込めて愛しい女の肉鞘に肉刀を突き込んでいく。秘肉を穿つ快感は童貞少年の理性をぐずぐずに崩し、高まる射精感はこらえがたく、全身に汗が浮かんでいた。

「はあっ、はあっ、はあっ――」

快感が理性の白い壁に染み込み、にじみが大きくなってかすかなほころびを黒く浮き上がらせる。ほころびはヒビとなり、甘く狂おしい快感は逆らいがたい性感の奔流となって抑制を押し流そうとしていた。

「も、もうダメっ。わ、私イクっ。イッちゃうううっ」

呼吸とともに上下する乳房が大きく揺れる。乳首が何もない空中に描く軌跡が不思議なほどに目を引いた。この胸の揺れだけでも男の欲望が爆発しそうだ。

「ぼくも、ぼくも無理だよっ。で、出るっっ」
彼女の内部が大量の分泌液とともに激しく収縮した瞬間、少年も同時に達していた。爆発的な快感に頭が真っ白になり、膨張する肉棒と収縮する肉壷の間で火花のごとくに快感が弾け、波紋となって全身に広がっていく。
熱された欲望の液体がドクドクと噴出して女体の奥を叩く。熱い泥濘のごとき粘膜がそれを受け止め、さらなる快感に女性器全体が収縮するのが快感を増幅する。
「はううっ、き、きてるうっ」
張りつめた亀頭粘膜が震え、ペニス全体が激しく脈動しながら熱く煮えたぎる快楽の液体を噴出する。衝撃で空白になった頭の中に射精の快感が広がっていた。
「あああっ、で、出てるっ。孝君のがあっ。いっぱいぃっ」
全身をわななかせながら快感の限界点に達した女が呻く。絶頂状態の女体の緊密な締め付けがさらに肉悦を増し、沸騰した快感に全身の皮膚が泡立つ気分だった。
「はあっ、はあっ、はあっ――」
身体が熱く、重い。両腕で身体を支えながら、肉悦を共有した女体を見下ろす。引き締まった腕、形よく盛り上がった乳房。綺麗に揃えられた髪からほっそりとした首筋が露わになっている。

「まだ、つながってるね……ちょっと恥ずかしいけど、気持ちよかったよ、孝君」
彼女の中はまだ小刻みな収縮を繰り返している。そのたびにペニスも反応してしまい、せつない快感がなおも続いていた。
「ぼくも、気持ちよかった。由香理さんとこんなふうにできるなんて……」
潤んだ瞳が見上げていた。視線が合うと、腕の力が抜けた。恋人の身体に覆い被さるようにして体重を預けると乳房の丸みがやんわりと受け止め、それだけでも身震いするほどの快感を呼び起こした。
「孝君とできて、うれしいな。大好きだよ、孝君」
「ぼくも、好きだよ。由香理さんに、ずっと憧れていたから……」
由香理の頬と自分の頬を合わせる。彼女の体臭とシャンプーの香りが混じりあっている。こうして抱き合っているのもまた気持ちがいい。
「もうちょっと、こうしていたいな……」
少年がつぶやくと、恋人の腕が優しく抱きしめてくれる。幸福な時間は、今少し続きそうだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**